
真・恋姫無双 チートで最強主人公

00フリーダム

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

真・恋姫無双 チートで最強主人公

【Nコード】

N3437L

【作者名】

00フリーダム

【あらすじ】

知らないじい様に殺され恋姫の世界に来た俺
チート能力でこの世界を変えてやるよ。

初めての作品で色々あると思いますがよろしくお願いします。

ブローグ（前書き）

あらすじ意味わかりませんよね。なるべく早く書き直します。
ではブローグどうぞ。

プロローグ

俺は目を覚ますと見をぼえのないところにいた。

あれなんかよく二次元小説でこうゆうのなかったけ。とか考えていたら目の前に白い髭のじい様がいた。

？『すまん！許してくれ』

と土下座していた。

「まさか、俺あんたに殺された？」

コクンと頷いた。

「ふざけるなー！ー！！」

「すまんそこで転生させ」なら許す！ー！！『えっいいの。』

いいに決まってる。

俺の夢は異世界に行くことだからな。

『なら能力を決めてくれ』

それなら

「ゲート『ちなみに人の領域を越える能力はだめじゃぞ。』ちっ」

まさかゲート・オブ・バビロンがだめとわなならば

「ならガンダムのキラと同じスーパーコーデイネーターでSEEDを自由に使えて純粋種のイノベーターで飛天御剣流を全てデメリツトなしで使えてあと生身でツインドライブやトランザム、とか使え

るようにしてしてくれ。後、逆刃刀・真打ちと寿十四郎が使っていた雪姫の二本の刀用意しといてくれ。後キラと同じ容姿で黒髪にしてくれ。」

『・・・最後のは能力じゃないし、能力は能力でチート過ぎるがまあいいじゃろ。』

『次に行くs』もちろん真・恋姫無双で！』そ、そうか。ちなみに平行世界だから好き行動していいぞ。』

「OKーー！」

『まあ原作とかなり違うじゃろうが。』

「？なんかいったか？」

『いや何でもない。じゃあ、行ってこい。』と言って俺の下に黒い穴が現れた。

「ふざけるなー！ー！！！」

そう言っただ俺は意識を放した。

『まあがんばれ』

といていたが主人公には聞こえていなかった。

プロローグ（後書き）

「俺名前でてねーじゃねーか!?!」

まあ我慢してくれ。

「ふざけるな!?!」

次書くから。

「全く」

次は設定です。本編はそのあとです。

「こんなダメ作者だがお願いします。」

設定（前書き）

設定です。他にも転生者だしたりします。

コードギアスとかはそっちで。

本編とかは今日か明日辺りには投稿したいと思います。

設定

刹那 龍也 (18)

死んで恋姫の世界に転生した人間。恋姫やガンダムがかなり好き。能力は以下の通り。

1・スーパーコーディネーター

身体能力が普通の人よりかなり上。(恋より少し上ぐらい。)

2・SEED

一時的に身体能力や反射神経が上がる。

(これをやるとほとんど誰も勝てない。)

3・純粹種のイノベーター(少しオリジナル)

相手の考えやわかり、トランザムバーストも使える。

4・ツインドライブ(オーライザー付きの状態)

GN粒子を作り自分の武器に纏わせることができる。(これをやると切れ味が上がったりする。)

5・トランザム

身体能力とかが7倍、他にも粒子可ができる。やろつと思えばトランザムライザーやトランザムバーストもできる。

6・飛天御剣流

飛天御剣流が全てデメリット無しで使える。

容姿

キラ・ヤマトと同じで髪が黒い所だけ違う。

設定（後書き）

龍也「なあ俺チート過ぎじゃないか？」

問題なし。

龍也「次から本編です。」

感想などがあつたらかいてください。

龍也「次回真・恋姫無双 チートで最強主人公 第一席 出会い

天空を翔け巡れフリーダム」

ガンダム風にやって見ました。次もお願いします。

第一席 出会い（前書き）

修正しました。

第一席 出会い

俺は目を覚ますと辺り一面荒野の所にいた。

龍也「あれは夢じゃなかったのか。」

口にだしてみて実感した。何より腰に雪姫と逆刃刀があるし。

ふと、横を見るとそこには、気持ち良さそうに寝ている恋姫の主人公の北郷一刀がいた。よくこんな所で寝てれるよなとか思いながらなんかあるまじい起こすことにした。

龍也「おい起きろ。」

といいながら一刀の体を揺すった。

一刀「うん。はっ。」

ここはあれあいつは？あれお前だね？」

とりあえず

龍也「俺の名前は刹那龍也。龍也でいい。お前は？」

知っているけど一応聞いてみた。

一刀「俺は北郷一刀よろしく龍也。ところでここどこだ？」

一応分かるが知らないふりをする事にした。

龍也「いや、気が付いたらここにいた。ところでお前なぜここにいるかわからないか？」

まあ、わかんないだ「俺は変な男が博物館から鏡を盗み出していたからそいつを止めようとして鏡を割ってしまって気が付いたらここにいた。」い、今なんて言った。男、博物館、鏡だトー！！それ

左滋！！ちよとふざけるな。真・恋姫なのにあいつらいるのかよ。正直あいつら存在その物がチートだから勝てる気しねー。とか考えたら、一刀「なあ、これからどうする？」

龍也「まずは町をさがしてここがどこか調べよう。」

そうゆうと一刀は近くにあった木刀をてにもった。

俺も行こうとしたら、

？「おい、待てよ兄ちゃん達。」

呼ばれて後ろを向くとそこにはあのやられキャラの黄布族がいた。

黄布A「兄ちゃん達、珍しい服着てるな。身ぐるみ置いてどっか行けば命は助けてやるよ。」

一刀「あのー頭大丈夫ですか？それとなぜコスP「うっせーなーとつとと身ぐるみ置いてけよ。」なっ」

と剣を向けてきた。

全くこの流れだと蜀か。とか思いながら逆刃刀をぬき一刀に向けられてる剣を逆刃刀の刃のほうで斬った。

「「「なっ。「「「

一刀も驚きながら木刀を構えようとしたが、

龍也「一刀こは、俺にまかしてくれないか？」

一刀「・・・わかった。きおつけるよ。」

龍也「ああ。」

丁度、力がどのていどか知りたかったからな。

一番小さい黄布族が

黄布b「て、てめー。」

龍也「悪いが速攻で終わらせる！！」

といいチビの攻撃をジャンプして避け上から龍也「飛天御剣流、頭龍閃」といいチビを倒した。

黄ぬc「このー」

とかいいながら突っ込んできたので「飛天御剣流、九頭龍閃」といいデブを倒した。

龍也「おい。」

黄布A「な、なんですか？」

さっきので力の差がわかったのか、なんか怯えている。

龍也「こいつら連れてどっかいK「済みませんでしたー。」おい、おい。」

とかいいながらやっぱスーパーコーディネーターすご、飛天御剣流もすごい。

一刀「・・・お前強いんだな。」

龍也「まあな。」

とか言ったりしていたら、

？」「さすがですね。」

と言われ声のした方を向くとそこにいたのは、一人の美少女だった。

第一席 出会い 終わり

第一席 出会い（後書き）

龍也「最後に出てきたり」「言っな」「ちっ」「

一刀「まあ、まあ。」

全く次回はあの蜀の三人と出会います。

龍也「自分でばらしてるし。」

うっせーな！

一刀次回予告よろしくお願い。

一刀「次回真・恋姫無双 チートで最強主人公。第二席 蜀の三人との出会い。 全ての闇を切り払えジャスティス」

第二席 天の御使い（前書き）

一応第二席更新です。

それと前回の次回予告と題名が変わっています。ごめんなさい。

では第二席 天の御使いどうぞ。

第二席 天の御使い

？「さすがですね。」

声のした方を見るとそこには美少女がいた。

龍也「君は誰だ？」

？「申し遅れました。私の名前は関雲長、よろしく申し上げます、
天の御使い様そして天の自由の使者様。」

一刀「えっ。ちよどうよ。」

何か言おうとした一刀の口に手を被せ関雲に聞こえないように聞こえないように言った。

龍也「一刀、俺達はこちらがどこかわからないが彼女は少なくとも知っているみたいだ。だから一刀の言いたい事も分かるがここはまた俺に任してくれないか？」

一刀は少し考え「わかった。」と言ってくれた。

龍也「えーと関羽少し聞きたい事があるんだが。」

関羽「何でしょうか？」さっき言われた中で気になったことそれは、
龍也「天の御使いや天の自由の使者って何？」

そうこれだ。一刀が天の御使いはわかる。

だが天の自由の使者って何だよ。てっかこの状況では俺がその天の自由の使者だよな。

関羽「天の御七「愛紗ちゃん」桃香様！それに鈴々！！」

劉備「愛紗ちゃん行くの早すぎるよー。」

張飛「そうなのだ。」 関羽「済みません。」

劉備「所でこの人達は誰？」

関羽「この方々は天の御使い様と天の自由の使者様です。」

劉備「えー。本当？」

張飛「怪しいのだ。」

関羽「何を言う。三人とはいえ族を一瞬で倒したのだぞ。」 劉備「へー。始めまして、劉備玄徳つていいます。よろしくお願いします、天の御使い様そして天の自由の使者様。」

張飛「鈴々は張飛翼徳なのだ。お兄ちゃん達。」

一刀「龍也どう思う？」

多分一刀が言いたいのは彼女達の名前だろうな。

龍也「彼女達が嘘ついているようには思えない。おそらく本当の事だと思う。」

一刀「じゃあ俺達タイムスリップしたって事か？」

龍也「多分違う。おそらくここはパラレルワールドだ。」

一刀「どう言う事だ？」

龍也「つまり「あのー、どうかしたんですか？」一刀後で詳しく説明する。いやなんでもないよ劉備。所で関羽さっきの質問まだ答えて貰ってないんだけど。」

関羽「そうでしたね。」

劉備「質問って？」

一刀「天の御使いや天の自由の使者って何か。」

関羽「天の御使いや天の自由の使者というのは自称大陸一という官路の予言にでてくるもの達のことです。」

龍也「その予言の内容わ？」

関羽「この大陸に乱世が訪れる時、天より遣われし御使いと自由の使者がこの地に舞い降りこの世界に平和をもたらすであろう。それが官路が予言した事です。そして、その物達の格好は御使いの方が白い光りを反射する服を着ていて、自由の使者は二本の剣を腰に刺し神速の速さの剣技を使うとの事です。」

「ってか確かに飛天御剣流は神速の速さとか言われてるけど何で官路そんなこと知っている？官路何物何だ？」

「とか考えていたらいつのまにか話が進んでいた。」

一刀「俺なんかで良ければいくらでも力を貸すよ。龍也はどうする？」

龍也「ん。ああ俺なんかで良ければ一刀と一緒に力を貸すよ。」

原作知らなかったら絶対話ついていけなかったな。」

龍也「とりあえずこれからどうする？」

関羽「近くに村があります。そこでこれからのことを考えましょつ。」

「

それに賛成して俺達は村に向かった。

第二席 天の御使い（後書き）

疲れたー。

龍也「何してる。」

気にするな。

愛紗「はあー。作者様もう少し考えて更新したらどうです?」

そうせていただきます。

龍也「ところでなぜ愛紗の真名になってる。」

次回それ書いとく。それじゃあ愛紗次回予告よろしく。

愛紗「解りました。村に行き、これからのことを考え、向かった先で誓うのは姉妹の契りそして思い次回、真・恋姫無双 チートで最強主人公 第三席 桃園の誓い 運命を打ち砕けデステエニー。」

第三席 桃園の誓い 前編（前書き）

始めての前編、後編です。それではどうぞ。

第三席 桃園の誓い 前編

あの後、俺と一刀は関羽達に真名を教えて貰った。一刀はご主人様と呼ばれるようになった。俺もそう呼ばれそうだったがどうにか説得できてご主人様とは呼ばれないが愛紗は、龍也様、桃香は、龍也君、鈴々は、龍也お兄ちゃんと呼ぶ事になった。そして色々話をしていたらいつのまにか村に着いていた。

今は、メシ屋で食事が終わった所。

龍也「それでこれからどうする？」

一刀「とりあえずこの辺の偉い人の所でやっている義勇軍の所に行くのが一番だと思う。」

龍也「さすがだな。」

一刀「まあ、一飯の恩が有るしな。」

桃香「一飯の恩？」

愛紗「一飯の恩ですか？」

鈴々「一飯の恩・・・」

どうかしたのか？待てよ確か原作では、確か・・・

一刀「一飯の恩がどうかした？」

桃香「えーと天の御使い様ならお金いっぱい持っているかなーと思
つて。」

愛紗「おごってもらえればと思ひまして。」

一刀「・・・つまり」

鈴々「鈴々達お金がないのだ。」

そうだ、お金がない。俺はなにもないが一刀がボールペンを持って
いるが忘れてるみたいだしな。俺は皿洗いが嫌いだ。だから・・・。

女将「お金がないんだってー」

桃香「えーとお金があると思ったらなくて」

愛紗「決して食い逃げをしようとしたわけでも」

女将「問答無用、みんな、であえ、であえ」

村1「女将さん食い逃げだってー。」村2「こんな時代に不届きも
のが」

と四、五人がでて来た。

一刀「皆さん何処から出て来たんですか！」

やはりこじは・・・

龍也「スマン。あとは頼む。」

といい俺は逃げた。

女将「ちっ逃げられたか。まあいい。あの男の分まで皿洗いをやって貰うよ。」

一刀「龍也ー！ー！ー！」

一刀の声が聞こえた気がしたが無視だ無視。俺はそいつって全力で逃げた。

龍也「何とか巻けたか。」かと安心したらギョツと服を掴まれた気がして後ろを振り向いたらそこには小さな少女がいた。

龍也「え〜と放してくれない？」と聞いて見ると

少女「食い逃げ。」

龍也「はー。」

子供じゃなきゃ逃げたけどしょうがないか。と諦めていたら、

少女「お兄ちゃん。」

龍也「ん？」

少女「盗賊倒すって本当？」

そういえば愛紗や一乃達がそんな事話っていたな。

龍也「ああ。だけど、どうかしたのか？」

少女「えっ。」

龍也「涙が出てる。」

俺が言っただけで気づいたのか慌てて拭いていた。

龍也「何かあったのか？」

そしたら少女は泣きながら答えてくれた。

少女「あのね、前に盗賊がこの村に来た時にお父さんとお母さんが殺されたの。だから、だから。」

龍也「・・・。」

俺は何も言わずに少女を抱きしめた。

龍也「泣きたかったら好きなだけ泣けばいい。泣き止むぐらいまでは側にいるから。」

そういつたら少女は泣き出した。

それからしばらくして、

愛紗「龍也様！ここ！その子供は？」

と愛紗が来た。

龍也「・・・前に盗賊が来た時に両親が殺されたそうだ。」

と言ったら少し複雑な表情をした。そして、少女が泣き止んだ。

龍也「もういいのか？」

少女「うん。ありがとう。これあげる。」と腕輪みたいのをくれた。

龍也「これは？」

少女「お父さんの形見。」

龍也「そんなのもらいいの。そのかわり必ず盗賊の人達を倒して

「・・・わかった。」

少女「後ろのお姉ちゃんはお兄ちゃんの仲間？」

龍也「ああ。」

そういつたら今度は愛紗にネックレスを渡した。

愛紗「これは？」

少女「お母さんの形見。」

愛紗「！！そんなもの貰えるわけないの。だから・・・わかりました。」

龍也「君の名前は？」

少女「桜。お兄ちゃん、お姉ちゃん、またね。」

そう言つて桜は何処かに走っていった。

龍也「必ず盗賊倒さないと。」

愛紗「ええ。」

龍也「そう言えば愛紗なぜここに？」

愛紗「あなた様が逃げたからでしょう。」

と愛紗が魔王の笑みで言つてきて一刀達が来るまで説教されていた。

第三席 桃園の誓い 前編（後書き）

今回は一刀と桃香です。

桃香「始めまして。」

一刀「龍也は？」

愛紗にお説教され中。

一刀「どんまい。」

桃香「あははは。（汗）」

それにしてもPVが二万越えました。

一刀「ありがとうございます。」

桃香「これからもこの小説をよろしくお願いします。」

次回予告は次は後編なのでなしてす。

後編はなるべく早く更新するのでお願いします。感想などもできたら書いてください。それでは。

第三席 桃園の誓い 後編（前書き）

後編の投稿です。

誓いがあるているか自信がないのでそこそこは許してください。

第三席 桃園の誓い 後編

あれから一刀達が来るまで愛紗が俺に説教していた。途中で逃げようとしたら青龍円月刀を振ってきて逃げられなかった。

龍也「そういえば、俺達何処に向かっているんだ？。」

一刀「ああ、なんでも桃香の知り会いの公孫纂っていう人の所に向かっているらしい。」

龍也「でなんで鈴々はあんなに喜んでるんだ？。」

一刀「ああ。あの店の女将さんがお酒をくれてそれをこの先の桃園で飲むらしい。」

龍也「桃園の誓いか。」

一刀「ああ。」

龍也「なあ、ところでさ「ん？」俺達まだ未成年だよな。お酒飲んでいいのか？。」

一刀「・・・まっまあこの世界には法律はないから。あはははは。」

いやだめだと心の中で突っ込んでいたら、

桃香「うわ〜。」

愛紗「これはすごい。」

とあたり一面花につつまれたまさに桃園という名が相応しい場所があった。

少しその花を見てみると

鈴々「なにをしているのだ。早くこっちに来てお酒を飲むのだ。」

愛紗「場の空気を読めないやからが一人いるようですが。」

とため息混じりに愛紗が言った。

一刀「鈴々がうるさいから早くいこう」

龍也「そうだな。」

といい俺達も鈴々達がいる所にむかった。

一刀「それにしてもまさかあの有名な場面に参加することになるなんてな。」

龍也「迷っていてもしょうがない。俺達に今出来る事は前に進む事だ。」

愛紗「その通りですね。」

一刀「そうだな。」

龍也「それにしてもこんな綺麗な花があるし何か宣言とかするか？」

と聞くと愛紗が少し微笑み

愛紗「我ら五人っ！！」

桃香「性は違えど姉妹、兄弟の契りを結びしからは、」

鈴々「心を同じくして助け合いみんなて力無き人々を救うのだ。」

愛紗「同年同月同日生まれること得ずとも」

桃香「願わくば同年同月同日に死せんことを」

龍也「誰もがわかりあい自由に平和な世界にするために」

一刀「願わくば、この日、この時、この場所を忘れぬために」

「「「「乾杯」」」」

俺達は花が舞い散るなか誓いを立てた。

第三席 桃園の誓い 後編（後書き）

第三席後編更新だー！ー！！

龍也「なにテンション上げているんだ？」

PV三万越えたからな。

龍也「まじか！！」

ああ。だから今回は桃園の誓いの後から公孫贄の所に行く所を三五として書く。

龍也「まさかこのダメ小説がそこまでいくとはな。」

まあ感想がないのが悲しいが

龍也「まあそこは我慢しろ。」

できれば感想書いてください。それじゃあ龍也次回予告よろしく！
龍也「ああ。桃園で誓いを立てた俺達。その後俺達がやったこととは？次回、真・恋姫無双 チートで最強主人公第三・五席 その後
暁の空に羽ばたけアカツキ。」

第三・五席 その後（前書き）

PV三万記念として書きました。

上手く出来たかわかりませんがどうぞ。

第三・五席 その後

桃園の誓いをやったあと少しここで休んでいくことになり俺は今愛紗と並んで座っているんだが、

龍也「なあ、愛紗。」

愛紗「なんですか龍也様？」

龍也「あいつらさっきまでなにやっていた？」

愛紗「おにごっこことやらですね。」

龍也「なんで熟睡しているんだ？」

愛紗「多分、先ほど酒を飲み、それで走り回ったからかと。」

龍也「はあ。この先大丈夫なのか？」

愛紗「しばらくは寝かせないとダメみたいですね。」

龍也「はあ。」

長くなるだろうなと思ひなんか持っていなかったかと思ひポケットをさがしていたら中からカロリーー イトが出てきた。そういえば朝何も食っていなくて冷蔵庫から何個か出したんだっけか思ひだしていたら、

愛紗「それは何ですか？」

とたずねてきた。

龍也「向こうで忙しい朝などで食べる物。」

愛紗「そうですか。」

龍也「愛紗も食べるか？」

愛紗「いいのですか？」

龍也「ああ。まだあるし食べなきゃ腐ってもったいない。」

愛紗「ではお言葉に甘えて。」

といい俺が渡したやつを食べようとしたが、

愛紗「・・・どうやって食べるのですか？」

そつえばこの時代じゃあそんなのないか、と思い

龍也「貸してくれ。」

といいふたを開けた。

龍也「ここに口をつけながらここを押して飲むんだ。」

と食べ方を教えた。

愛紗「なるほど。・・・!!これは桃ですか？」

龍也「ああそうだけど。」

愛紗「こんな物も天の国にはあるんですね。」

龍也「まあ。そうだな。うまいかそれ？」

愛紗「ええ、とても。」

龍也「そうか。似たのだったら作れるけど今度作るっか？」

愛紗「ええお願いします。」

龍也「少し食後の運動するか？」

愛紗「かまいませんよ。」

といい、俺達は少し撃ち合った。

それも終わり、また座っていたら、

愛紗「龍也様。」

龍也「ん？」

愛紗「あなたはどうかやってその力や技術を？」

龍也「えっ。まっまあ色々ははは。」

いえねー。神様とかにもらったなんていえねー。

愛紗「？まあそれほどの力や技術なら十分この世界でも通用しますよ。」

龍也「そうか。」

「ってか通用しなかったらあんたらどんだけ強いんだよ。と
思っていたら、」

愛紗「・・・本当に出来るのでしょうか。」

龍也「何をだ？」

愛紗「この世界を平和にできるのしょうか？」

龍也「・・・」

愛紗「たった五人で世界を平和に出来るのでしょうか？世界は黄巾党
が暴れ回り戦乱へとむかっています。それを・・・」

龍也「・・・確かに今は五人かもしれない。だけどきつと同じ思
いを抱き仲間になってくれるやつもいるさ。それに、」

愛紗「それに？」

龍也「何もできないって言って何もしなかったら絶対に何もでき
ない。だからまず行動すること後はそれからだ。」

愛紗「・・・そうですね。」

龍也「まあ、ある人の受け売りだけだな。」

愛紗「立派な方ですね。」

龍也「ああ。」

まあ、アニメの人だけだな。

龍也「さあ、そろそろ一刀達を起こすか。」

愛紗「そうですね。」

そうして俺達は一刀達を起こして公孫贊の所に向かった。

第三・五席 その後（後書き）

第三、五席終わった！。

桃香「お疲れ様。」

龍也「そこまでなるまでよくやったな。」

まあ、初めて感想がきて頑張ったからな。

龍也「さようか。」

感想ありがとうございます。

愛紗「ところでさっきの言葉は誰のなんですか？」

ああ。龍也が言っていたやつか。あれはガンダムSEEDのキラ・ヤマトとDESTINYのラクス・クラインの言葉。

愛紗「誰ですか、それ？」

まあそんなことより、

愛紗「そんなことですかませるのですか！！」

桃香次回予告よろしくお願ひ。

桃香「は〜い。白蓮ちゃんの治める所についた私達。白蓮ちゃんに会うためにしたことは。次回真・恋姫無双チートで最強主人公第四席 龍也の策 大空をまえレジェンド。」

第四席 龍也の策（前書き）

第四席更新です。

ラッカーさん、お年頃さん感想ありがとうございます。

では第四席どうぞ。

第四席 龍也の策

俺達はあの後一刀達を起こして公孫贄の治める町に向かった。そして無事に町に着いたがここで問題が起きた。

愛紗「桃香様。もう少し後先考えて行動してください。」

桃香「ごめんなさい。」

桃香は公孫贄に会うための事を考えていなくて今愛紗に説教されていた。

一刀「愛紗もそこらへんにしたらどうだ？」

さすがにこれ以上はかわいそうだしな。

愛紗「しかし」

龍也「愛紗のいいたいことも分かるが、今考えるのは、これからどうするかだ。」

愛紗「そうですね。」

桃香「え〜と、何か案がある人。」

と桃香が言ったが誰も何も言わなかった。

てっか一刀お前なんで原作だったら案出したのに出さないんだよ。は〜あ。しょうがない。

龍也「先程町の人達が言っていたがどうやら公孫贄は義勇軍を集めているらしい。」

「刀「それがどうした？」

龍也「そこにたくさんの方隊を連れて来たら向こうはどうする？」
愛紗「なるほど！義勇軍を集めているのであれば、兵を沢山連れていけば確かに公孫贊殿に会えます。」

鈴々「でも、鈴々達にはそのたくさんの方隊がないのだ。」

龍也「鈴々。俺は何も本当の方でやるなんて言っていないぞ。」

愛紗「成る程、偽方ですか！！」

「刀「ああ！成る程。」

愛紗「ふふ。あなたもお方が悪い。」

龍也「違くない。だが仕方がないだろう。今は公孫贊に会うのが最優先だからな。」

愛紗「確かに。」

「刀「そうだな。」

桃香「え〜と。みんなで納得している所悪いけど。何が何だか解らないんだけど。」

鈴々「そうなのだ！！鈴々達にも分かるように説明して欲しいのだ。」

「刀「ちょっと、二人とも解らないのか？」

桃香「ぜんぜん。」

鈴々「わからないのだ。」

なにげに今、言葉がつながっていたよな。

一刀「はあ。つまりたくさん兵を雇って公孫贊に会うまでの間兵をやって貰うって事。」

桃香「・・・ああ。なるほど!!」

桃香よ今の間は何なんだ。

鈴々「龍もお兄ちゃんもやるのだ。」

鈴々、本当にわかったのか？

龍也「それで金はどれくらいあるんだ？」

桃香「私達のお金は全部、愛紗ちゃんが管理しているよ。」

一刀「それで、どれくらいあるんだ愛紗？」

愛紗「ここの飯代を払ったらこれだけですな。」

と袋から一枚硬貨が出て来た。

愛紗「済みません。若干一名お飯しぐらいがいます。」

と鈴々の方を見た。

鈴々「り、鈴々は悪くないのだ。」

桃香「育ち盛りだもんね。」

愛紗「桃香様も甘やかさないでください!!」

一刀「はは。こうまで来るとさすががしいな。」

龍也「はゝあ。しかたがない。この際仕方がない。俺達の持ち物を売って金にしよう。一刀何かないか。」

一刀「えっ。え〜と。・・・あつ。これならいい値で売れるかも。」

と原作道理、ボールペンを出してきた。

龍也「確かにこの時代だったらかなりの値が付くな。」

愛紗「龍也様、ご主人様、それは?」

龍也「それはボールペンって言って紙に書いたりした物なんだ。」

一刀「え〜と、この時代だとさ筆に墨を浸けて書くだろ。だけどこれなら、・・・ほら!」

と書いて実践してみた。

愛紗「おお!!」

桃香「す〜い〜」

鈴々「お兄ちゃんこれちょうだい。」

一刀「だめだめ。これ一個しかないから。それで、どうだろ愛紗？」

愛紗「はい。これなら実演して売ればかなりの値で売れるかと。」

桃香「はい。私が売「だめだ（です。）」「え〜。」

愛紗「桃香様がいけば足元を見られます。」

龍也「だから、俺と愛紗が行く。」

桃香「え〜。ぶう、ぶう。」

一刀「まあ、まあ。桃香も落ち着く、落ち着く。」

鈴々「愛紗も龍也お兄ちゃんも早く行って来るのだ。」

龍也「ああ。」

そういつて俺と愛紗はボールペンを売りに行った。

所変わつてとある村。

桜「おじいちゃん大丈夫？」

村人「すまないね。」

桜「うん、うん。」

村2「いいのかいいつも。」

桜「きにしないで。」

桜は龍也とかと別れた後村の人達で苦労している人を助けていた。

桜「お兄ちゃん、お姉ちゃん、元気かな。」

と考えていたら、見をぼえのある旗を掲げていた集団がいた。

桜「あつあ。」

黄巾党・・・

桜「助けて、お兄ちゃん、お姉ちゃん。」

少女は祈った。それが届くかは、わからないまま。

また所変わって

龍也「っ!！」

一刀「どうかしたのか？」

龍也「いや。何か行かないといけない気がする。」

愛紗「龍也様もですか？」

龍也「愛紗もか？」

愛紗「ええ。忘れてはいけない何かを思い出さないといけない気がして。」

桃香「うん。何かあったけ。」

俺達はボールペンを高値で売れ今兵を集めている。

忘れてはいけない何かがある。そんな気がしてならない。

村A「なあ聞いたか？」

村B「ああ。近くの村が黄巾党に襲われたって話か？」

村A「ああ。」

近くの村・・・

龍也「なあ、近くの村って、まさか。」

愛紗「間違いありません。私達が先刻いた村です。」

桃香「そういえば、龍也君、皿洗い逃げたよね。」

一刀「そうだよ。あれはひどいぞ。」

皿洗いから逃げた・・・

龍也「っ!?!」

桜！！

龍也「悪い。少し金使う！！」

俺はそついい走って馬を買いに行った。

一刀「おっおい。」

桃香「龍也君！！」

龍也「生きていてくれ桜ー！！」

ただ少女の無事を祈って。

第四席 龍也の策（後書き）

や、やりとげた。

龍也「だ、大丈夫か？」

疲れた。

愛紗「今までで、一番長いですからね。」

龍也「それにしても、まさか、四万PV、一万ユニークを越えるなんてな。」

皆さん本当にありがとうございます！！

次回が今までで一番長くなるかも知れない。そしてシリアスに……

龍也「大丈夫なのか？」

頑張ります。

龍也「そうか。」

愛紗「ならいいのですが。」

皆さんできたら感想などたくさん書いてください。なるべく返信するので。それじゃあ、愛紗次回予告よろしく！！

愛紗「わかりました。

少年は走った。ただ少女の無事を祈り。そこにあるのが絶滅とは知らずに次回、真・恋姫無双 チートで最強主人公 第五席、遅すぎ

た覚悟 全てを破壊し尽くせデストロイ。
」

第五席 遅すぎた覚悟（前書き）

第五席更新です。

少しシリアスです。

感想や質問書いてください。まっています。
KYOさん感想ありがとうございます！！

第五席 遅すぎた覚悟

あれからしばらくして俺はあの村に着いたがそこは俺が最後に見た村の面影は一切なく、見てすぐに賊に襲われたとわかった。

龍也「桜は……」

俺は必死に桜の名前を呼びながら探したが見つからなかった。そんな時、

村1「おぬし桜ちゃんの知り合いか？」

と村の生き残りのじいさんが話かけてきた。

龍也「！！桜は！！桜を知っているのか！桜は何処いる！」

村1「……桜ちゃんはわしらをかばって、それで黄巾族に連れていかれた。」

龍也「……黄巾族は何処に。」

村2「ここから西の所に陣をとっていると村の若い物が言っていた。」と別の老人が答えてくれた。

龍也「……そうですね。ありがとうございます。」

と歩こうとしたら、

村1「どこに行くのじゃ？」

龍也「・・・奴らの所に。」

村1「!!!!・・・正気か。」

龍也「・・・」

村2「ひとつ頼みがある。」

龍也「・・・俺に出来る事なら。」

村2「それは・・・」

所変わって

桃香「ど、どうしよう!!--」

一刀「落ち着いて桃香。」

桃香「だ、だって。」

一刀「とりあえずどうするか決めよう。」

桃香「う、うん。」

鈴々「でも龍也お兄ちゃんどうしてあんな焦っていたのだ?」

桃香「わかんない。愛紗ちゃん、何か知らない?」

愛紗「・・・じつは、」

愛紗説明中・・・

一刀「そんな事が、あの村であったのか」

桃香「だから、あんなに・・・」

鈴々「龍也お兄ちゃん・・・」

愛紗「・・・」

一刀「・・・助けに行こう。」

桃香「うん!!」

鈴々「龍也お兄ちゃんを追うのだ!!」

愛紗「ええ。」

龍也様どうかご無事でいてください。私達もすぐに行くので。

一方その頃

今俺は、黄巾族の群れの中を駆けていた。

龍也「桜。何処にいる!!」

黄1「何だこいつ。」

黄2「おい、てめー。」

龍也「何だ。」

黄2「此処がd「何処だ。」 あっあゝ」

龍也「お前らがあの村からさらった少女は何処だ。」

黄3「お前にK「まあまで。」 頭。」

頭「此処まで来たんだ。教えてやってもいいだろ。お前ら!!」

そついつて黄巾族の群れが割れ一つの道が出来た。

龍也「桜!!」

そついつて行ったさきにあったのは、真っ赤な、真っ赤な、桜の花。

誰がやった。

俺は桜の血で濡れた体を抱き寄せだきながら思い出していた。

村2「それは、桜ちゃんの遺体だけでいいから持って来てくれ。せめて、丁重に埋葬したい。」

龍也「生きて連れてくる。」

村2「そうか。」

と悲しい顔して言った。

今思えば、あのおじいさんはあの時、さしっていたのかも知れない。
もう生きた桜と会えないことを。

守れなかった。生きて連れて帰ると言ったのに。

黄1「しぶとかったぜ。」

黄2「お兄ちゃん、お姉ちゃんって、呼んでいたぜ。お前がお兄ちゃんか？その割にはにっていないな。」

そうか。お前達がやったのか。

頭「まあ、死ねや。」

その瞬間俺の頭の中で何かが弾けた。

ズバ。

俺は、反射的に切り掛かった頭と呼ばれた奴の剣を切り裂いた。

頭「えつ。」

龍也「貴様ら、生きて此処から逃げられると思つなよ。」

そういつて俺は黄巾族の奴らを切り始めた。

永遠にも感じた。黄巾族があれから一斉に攻撃して来たがSEED

を発動した俺にはスローモーションのように見え全く意味がなく一瞬で切り裂いた。それからたくさんのやつを斬った。命ごいをするやつ、逃げようとしたやつ、向かってきたやつ、それを感情無く全てを斬った。そして、

龍也「後は、お前だけだ。」

最初に足を切り裂き逃げられ無いようにした頭と呼ばれた物だけだった。

頭「ま、まってくれ。」

その言葉を見無視して近づく。

頭「家族がいるんだ。だから、」

龍也「黄巾党の本拠地にか？」

頭「あ、ああ。」

龍也「なら、安心して死ぬ。すぐ家族も地獄に送ってやる。」

そう言っつて刀を振った。

ガキン！！

刀を別の刃が邪魔した。

龍也「なんで邪魔をするんだ？愛紗。」

とその武器をもつものを見ながら言った。

愛紗「もうやめてください、龍也様。」

私は目の前の光景に目を疑った。

そこにあつたのは辺り一面の死体。

先程村に付き村人から龍也様がこつちに向かったと聞き鈴々に桃香様達に報告しておいてくれと頼み来た。

そしてあつたのは死体。

愛紗「龍也様は……」

いた。が龍也様が抱いている物を見て悟った。助けられなかった。

そして、この死体の山を作ったのも……

そして、龍也様が刀で黄巾族を斬ろうとしたので私は、

ガキン！！

青龍円月刀でふせいだ。

龍也「なんで邪魔をするんだ？愛紗。」

愛紗「もうやめてください龍也様。」

龍也「……」

頭「あんたもだまれ！！」っ。

私は黄巾族に叫んだ。精神がすでに参っていたのか気絶した。

愛紗「これ以上こんな奴を斬っても貴方の手が無意味に汚れるだけです。」

龍也「・・・」

愛紗「それにこんな奴を斬っても桜は喜びません。」

龍也「！！・・・そうだな。」

と刀を納めながらいった。

少しの静寂。そして龍也様が口を開いた。

龍也「・・・守れなかった。村の人に生きて連れて帰るといったのに。桜を、俺は。」

愛紗「・・・」

龍也「何もわかってなかった。わかってるつもりだった。・・・桜に恨まれてもしょうがないよな。」

愛紗「・・・龍也s『それは、違うよ。お兄ちゃん、お姉ちゃん。』えっ。」

そこにいたのは死んだはずの桜だった。

第五席 遅すぎた覚悟（後書き）

一刀「作者なにやっていた。」

しょうがないだろう。

桃香「なにが？」

テスト前だから大変なんだよ！！

龍也「お疲れ様。」

愛紗「それにしても今回は今までで一番長くなりましたね。」

頑張って書いたから。

鈴々「こんな作者だけどよろしくお願いするのだ！！」

じゃあ次回予告一刀お願い！！

一刀「ああ。失意にくれる龍也達。そこに現れた少女。少女は龍也達に何を伝える？次回真恋姫無双 チートで最強主人公 第六席少女の思い。 思いを守りきれ、ストライク。」

第六席 少女の思い（前書き）

大分遅れてすいません。テストやら修学旅行やら色々ありまして。その割に短いです。

それと出来たら感想で批判などは書かないでください。これ以上直しようがないので許してください。誤字脱字報告は随時待っています。後今回は後書きを見てください。

第六席 少女の思い

桜「私お兄ちゃん達の事恨んでいないよ。」

龍也「どうしてだ桜。俺は間に合わなかったんだぞ。」

桜「ううん。それはいいの。」

龍也「えっ。」

桜「見つけてくれたから。泣いてくれたから。怒ってくれたから。」

龍也「くっ!!」

桜「お姉ちゃんもだよ。」

愛紗「えっ。な、何故だ。私は桜を殺した奴を・・・」

桜「私もあれ以上お兄ちゃんに手を汚して欲しくなかったら。」

愛紗「桜・・・」

桜「だからね、お兄ちゃん、お姉ちゃん、自分を攻めないで。」

龍也「それでも俺は「お兄ちゃん。」「えっ。」

桜「私ね、お父さんとかがね殺された時ねもう一人だと思った。だけれどねお兄ちゃん達がね話かけてくれたから一人じゃないと思えたんだよ。」

愛紗「桜…。」

桜「だからね、お兄ちゃん、お姉ちゃん、大好きだよ!!」

そう言つて桜は消えた。

龍也「愛紗、俺は戦う。」

愛紗「・・・」

龍也「たとえ世界から憎まれようと世界から恨まれても俺は戦う。もうこんな悲しみを繰り返させないために俺は、戦う。」

愛紗 side

龍也「俺は、戦う。」

龍也様、私では貴方の心は癒せませんか？
癒せるなら私は…貴方のそばにいたい。

愛紗 side out

それからしばらくして一刀達も来て村にもどつた。本当は戻りたくはなかったが村の人と桜を渡す事になつていたので戻つた。
そして

龍也「すまない、約束は守れなかった。」

村1「いやいい。何となくわかっていたことだ。」

龍也「そうか。」

村2「頼みがあるんだがいいか？」

龍也「なんだ？」

村2「この先に道なりにそって行った所に村を眺める事が出来る丘がある。そこに桜ちゃんのお墓を作って来てくれないか？」

龍也「わかった。」

そついい行こうとしたら、「すまないが何人かは残ってくれないか？」と言われ一刀と桃花と鈴々が残ってくれた。

一刀side

龍也達は先に行かせた。桜ちゃんの事をこの中で一番知っているのは龍也と愛紗だからな。それよりも何故村の人は残ってくれといったのかな？と思っていたら、

村1「じつは頼みがある。」

桃花「なんですか？」

村1「じつは……。」

それは俺達が思いにも寄らない事だった。

一刀side out

俺と愛紗が戻ってきたら一刀達がかなり慌てていた。

龍也「どいしたんだ？」

一刀「龍也！じつは町の人が俺達に県令になつてくれって。」

成る程それでな。まあ、県令ていえば現代でいう市長見たいな物だからな。いきなりそれになつてくれと言われてもな。

龍也「他の村の人達は何て言っているんだ？」

一刀「やつてくれって。どうすればいいと思うっ？」

龍也「お前と桃花が決めたらしい。なあ、愛紗。」愛紗「はい。私達は桃花様達が決めた事に従います。」

一刀「桃花はどう思うっ？」

桃花「私は、・・・受けたい。」

一刀「・・・わかったよ。やつて見るよ。俺も。」

龍也「そうか。」

一刀「じゃあ俺はこの事伝えて来るよ。」

そういつて一刀達は村の人達の所に行った。

そして、しばらくして宴会が行われた。県令が変わっただけで宴会つて・・・前の県令一体どんな奴なんだ？と疑問を持ちながら俺も出席した。

しばらくして俺は桜の墓の前に来ていた。

龍也「……」

？「龍也様、やはり此処でしたか。」

と言われ振り向くと愛紗がいた。

龍也「愛紗どうして？」

愛紗「龍也様が急に居なくなっていたので。龍也様は何故、此処に？」

龍也「報告にな。」

愛紗「報告？」

龍也「ああ。いきなり世界を変えるなんてできないからな。少しだけ夢に進めた事をな。」

愛紗「そうですか。」

龍也「戻ろう。いつまで此処にいたら一刀達がつるさそつだからな。」

愛紗「はい。…私も龍也様の夢、微力ながら手伝います。」

龍也「……ありがとう愛紗。」

愛紗「いえ。」

そういつて戻ろうとしたら、

『頑張ってお兄ちゃん!!』

振り返るがそこには墓が一つ有るだけだが、

龍也「・・・ありがとう桜。」

確かに思いは伝わった。

愛紗「龍也様？」

龍也「なんでもない。戻ろう。」

そういつて俺達は一刀達の所にもどった。

所で一刀達が酒飲んでいたら止めないとな。一応まだ未成年だしな。

第六席 少女の思い（後書き）

龍也「作者、一ヶ月も更新しないで、なんだ、この短さ!!」

愛紗「そうです!!」

うるせー!!

一刀「さっ三人とも落ち着いて。」

桃花「そうだよ。」

鈴々「そうなのだ。」

龍也「それよりも作者何か発表があったんじゃないのか?」

ああじつは、今度特殊なコーナーを作ろうとされていてその関係でアンケートをな。

愛紗「内容は?」

キャラクターに対する質問とか。

桃花「いつやるの」

ある程度貯まりしだい。

一刀「そうなんだ。」

じゃあそろそろ次回予告をあ「鈴々がやるのだ!!」わかったよ。
鈴々よろしく。

鈴々「よし。県令になったお兄ちゃん達そこにまっていた物とは
？次回 真・恋姫無双 チートで最強主人公 第七席 日常1 大
地を走りされガイアなのだ。」

感想とアンケートお待ちしております。

第七席 日常1（前書き）

お待たせしました。

受験勉強などでたぶん一ヶ月更新になると思います。

アンケートは出て来たキャラなら誰でもいいです。キャラに質問ややって欲しい事があったら書いてください。

感想、誤字、脱字報告は随時お待ちしています。

それでは第七席 日常どうぞ。

第七席 日常1

あの後結局お酒を飲んでいた一刀と桃香と鈴々を愛紗と一緒に酔いを覚まさせたが、次の日から書類という地獄が始まった。

前の県令が半年もやっていなかったからものすごい大変だった。

しかも、一刀と桃香はよく逃げるからその分俺と愛紗に回ってくる。正直、三日も寝ていないのは辛い。

しかも、俺と愛紗は、兵隊の訓練、町の警備、書類の三つを掛け持ちだから余計疲れる。

ちなみに鈴々は兵隊の訓練と町の警備だがよく町の警備をサボり愛紗に怒られてる。

今は、一刀達が逃げた書類整理を愛紗としている。

愛紗「龍也様、大丈夫ですか？」

龍也「正直気眠い。」

愛紗「一体何日間寝てないのですか？」龍也「三日ぐらい。」

愛紗「……一体何をしていたのですか？」

龍也「ほぼ一刀達がサボった書類整理。」

愛紗「済みません。桃香様達が戻ったら悪、覇、那、死、をしてお

きますから。」

愛紗その笑み怖いから。

龍也「ほどほどにな。」

愛紗「ええ。」

一刀、桃香「ただいまー！！！」

愛紗「桃香様、ご主人様今すぐそこに正座してください。」

一刀「えっ。なん「早くしてください」……わかりました。」

やばい、今の愛紗ならあの白い魔王にも勝てるかも。

愛紗「桃香様、ご主人様、まずは、悪、覇、那、死、をしましょうか。」

桃香「あ、あのね、愛紗ちゃ「言い訳は無用です。」……はい。」
まずい眠気が耐え切れない。

ガッタ

愛紗「龍也様！！！」

その声が聞こえた後、椅子から落ちた俺は寝てしまった。

愛紗Side

愛紗「龍也様！！！」

よかった。寝ているだけですか。

桃香「愛紗ちゃん。龍也君は？」

愛紗「大丈夫です。寝ているだけです。」

一刀「でもなぜいきなり・・・」

愛紗「誰の性だと思いますか？」

一刀「？自分達です。」

愛紗「……桃香様、ご主人様。」

「「なんでしょうか。」」

愛紗「今そこに私と龍也様がやっていた書類があります。それを今日中に終わらせて下さい。」

桃香「え〜と、終わらなかつたら？」

愛紗「それこそ本当に悪、覇、那、死、をしましょう。」

「「……はい」」

愛紗「では、私は龍也様を寢床に寝かせて来るので。」

愛紗 Side out

……あれなんで俺ベッドで寝ているんだ。

えーとたしか愛紗と書類整理していて、一刀達が帰って来てそれで……ああ、眠気に負けて寝たのか。

あれでも誰が俺を・・・

龍也「・・・ありがとう愛紗。」

周りを見たら愛紗が椅子に座って寝ていた。
多分、俺を連れて来てそのまま寝たんだろう。
それにしても腹が減った。今何時だ？

龍也「もう夕方か。」

そういえばまだ昼を食べていなかったな。
久しぶりに料理でも作るか。

そう考えながら俺は厨房へ向かった。

龍也 Side out

愛紗 Side

愛紗「あれ私は……」

そうだ。龍也様を寝かせた後眠くなって椅子に座りそのまま……
あれ？

愛紗「では誰が私に毛布を……。」

そういえば龍也様は……

愛紗「一体何処にいったのでしょうか。」

龍也様が寝ていた所には誰もいなかった。

龍也「起きたのか愛紗。」

愛紗「龍也様一体何処に行っていたのですか？」

龍也「腹が空いてな。久しぶりに料理をしただけだ。」

愛紗「龍也様。料理が出来たのですか？」

龍也「ある程度はな。食べるか？」

愛紗「いいのですか？」

龍也「ああ。愛紗が食べる時用に二人前は有る。」

愛紗「では遠慮なく。」

食べてみたら驚きました。

愛紗「龍也様。これは私が食べた中で一番美味しいですよ。」

龍也「そうか？まあ他人に食べて貰ったのは初めてだからな。」

愛紗「えっ、そうなんですか。」

龍也「ああ。」

では私は初めて龍也様の料理を／＼／＼つてなにを考えているんだ私

は!!

龍也「どうかしたのか？」

愛紗「い、いえなんでも。」

この気持ちは何なんだろう。このあつたかい気持ちは。

愛紗 Side out

さっきからころころ表情が変わっているが大丈夫か愛紗は。

まあ本人が大丈夫といっているんならいいが。

愛紗「ところで龍也様。これは何という料理なんですか？」

龍也「ああ。これは、オムライスだ。」

愛紗「おむらいます、ですか？」

龍也「ああ。そういえば一刀達は？」

愛紗「政務をしているはずですが。」

龍也「食い終わったら様子を見に行くか。」

愛紗「そうですね。終わってなかったら、悪、覇、那、死、をしな
ければ。」

龍也「はー。ほどほどにな。」

愛紗「はい。」

普通にしていたら美少女なのにな。

愛紗「どうかしましたか？」

龍也「いや、何でもない。」

結局その後一刀達の所に行ったら寝ていて、物の見事に魔王を呼んだ。

はー。また疲れが溜まりそうだな。

第七席 日常1（後書き）

疲れた。

龍也「お疲れ様。」

一刀「そういえば龍也って料理出来たんだ。」

龍也「そこまで凄くない」

愛紗「いいえ、あれは凄すぎます。」

鈴々「うゝ食べて見たいのだ。とゆか作者鈴々今回一度も出ていないのだ!!」

済みません。出すタイミングが無くて。ちなみに龍也の料理はなのはの朋子さんレベルです。

桃香「へゝ凄いなあゝ。」

愛紗「それよりも桃香様、ご主人様、政務はどうしたんですか？」

「「今すぐして来ますから、悪、覇、那、死はやらないで下さい。」

愛紗「全く。」

鈴々「？龍也お兄ちゃん。あれどうしたのだ？」

龍也「鈴々世の中には知らない方がいいこともある。」

そつだぞ。出せなかったお詫びに次回予告は鈴々よろしく。

鈴々「うん。わかったのだ!! またあらたな戦場で戦つなか、

龍也お兄ちゃんはその天才軍師の二人と会う。次回、真・恋姫無双

第八席 龍と鳳凰 蒼天の空にとベストライクなのだ!!」

お知らせ（前書き）

お知らせです

お知らせ

済みませんがこの小説はもう更新しません

理由はなのはの方を優先させたいのと

この小説を最初からやり直そうと思ったからです

色々直したくなったので

ちなみにこの小説のリメイク版の小説をすでに始めています

主人公や性格、始まる所、能力などは違いますが……

ですのでよかったらそちらの小説を読んで下さい。

いくらかマシになってると思うので

魔法少女リリカルなのは 最強なのに介入したくない転生者
もよかったらよんで下さい

それでは今までありがとうございます！！

お知らせ(後書き)

今までありがとうございました

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3437/>

真・恋姫無双 チートで最強主人公

2011年1月8日10時34分発行